

関真和先生—細川巖師往復書簡

この往復書簡は、ご記憶の方もいらっしゃると思いますが、昨年の文化講演会で講師の志慶真文雄師が紹介、朗読されたものです。その時、感動しまして、志慶真先生のホームページ「まなざし仏教塾」から原文を入手しました。再読、再々読して、南無阿弥陀仏によって結ばれ、また育まれた師弟愛に思わずジーンときました。少々押しつけがましいのですが、是非皆様にも読んで頂きたいと思い、編集員の独断と特権でここに掲載させて頂きました。



◆関先生から細川先生への書簡

『合掌 先生、長い間ありがとうございました。このことばは何度いってもいい尽くすことができません。福岡学芸大学時代、本校で先生にお会いし、仏法にあわせていただき、大きな世界のあることを知らせていただきました。あの当時二年制で教員になることも可能でしたが、四年制課程で本校に行けたことがいかに大きなことであったか、今にしてつくづく思います。先生にお会いできたことが、最大の収穫でした。その後、卒業以来も久留米を中心に仏法を語っていただき、時に父のごとく、時に教育者ともなり、私を育ててくださいました。

前後しますが、大学四年の時父がなくなり、その時先生にいただいた「日輪没する処、明星輝き出ずる如く、人生の終焉は永遠の生の出発である」ということばは、その当時私の大きな救いとなりました。そして、今、病床でこのことばをかみしめています。

以来三十数年、先生のみ教えを通し、夜見先生(注1)、親鸞聖人、七高僧、釈尊と連綿とつらなる深い歴史観を頂きました。このことは私に人生をいかに豊かにしてくださったことでしょうか。また、教育をしています上でも大きな励みとなりました。

お念仏「南無阿弥陀仏」をいただいた故に、生きることができ、お念仏いただいた故に死んでいけます。もし、お念仏におあいていなかったら、今ごろこのベッドの上でのたうちまわっていると思います。肉体的にはたいへんきついです。すわるのもちょっとした時間でしかできないくらいです。でも、心は平安です。

先生を通して、たくさんのお同朋をいただき、にぎやかです。

先生、本当にすばらしい人生をたまわりましてありがとうございました。

最後の一呼吸までは生きるための努力を続けます。

先生、本当に長い間ありがとうございました。

先生は、病気回復期ゆえ、どうかお体お大事になさってお同朋の大きな光となってください。

ことばは尽くせません。ありがとうございました。

平成五年六月二十四日 関 真和』

(注1) 住岡夜見先生;細川先生の師

◆細川先生から関先生への返書

『関君、いよいよ大事な時になったなあ。この病気は後になるほど痛みが増すと聞いているが、君もさぞたいへんだらう。慰めようもない。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏におあいできて本当によかった。

これが人生のすべてであった。

私は昨年十二月以来入院して、このことをいよいよ知った。君も同じだと思う。本当に良かった。南無阿弥陀仏。人間、最後の場に立ったとき、心に残るものが二つあるという。

一つは死んだらどうなるのかという問題

一つは残った者はどうなるのかということ。

諸有衆生 聞其名号 信心歓喜 乃至一念 至心回向(注2) 如来の至心回向によって、われらは信心念仏を賜わり、願生彼国と生きていく方向を知り、即得往生 住不退転 ここが浄土の南無阿弥陀仏となる。

死ぬも南無阿弥陀仏

生きるも南無阿弥陀仏ただこのこと一つ

残った者は私の死を見て、何かを得て、それぞれの人生を歩む。私は願う、どうか良い縁を得て、この道に立ってくれよ、南無阿弥陀仏、と。

このこと一つを願い、このこと一つを南無阿弥陀仏に托して歩んでゆく。

すべてを如来におまかせして進むとは、この事である。

こうして念仏道に立つ者には、残る問題は一つもない。

関君、どうか、学芸大学時代から、田川、飯塚と、本当に長い間、よく聞法してくれた。有難う。君が一生かけて如来実在したもう証明者として生きてくれてうれしい。

私の方が先に浄土に行っていると思ったが、君が先かもしれぬ。しかし、あともさきもない。皆、南無阿弥陀仏を生きてゆくほか道はありえない。

よかった、よかった。君の人生、苦勞もあり、誤りもあり、思うようにならなかったことも少なくなかったと思うが、人生の最後にあたって、感謝し、有難うございますと言える人は白蓮華である。

私は大分よくなった。あと何年かは働けるだろう。君の分も背負って、如来のため、報謝の一道を進みたい。

平成5年六月二十六日 細川 巖』

(注2)『浄土三部経』(上)「仏説無量寿経」巻下 岩波文庫186頁

感話
シリーズ-13【中原寺門信徒ご旧蹟参拝旅行に参加して】
実施日:5月25日(日)～26日(月)の1泊2日

天候は2日間共、曇りでしたが崩れず暑くもなくいい旅でした。参加者33名は25日朝9時に市川駅北口を出発して、横須賀市逸見町の本願寺派浄土寺さんへ参拝。

このお寺は、三浦按針「ウィリアム・アダムズ 英国人」でお馴染みの歴史あるお寺です。彼のお墓の発見は、1872年(明治5年)横浜在住のイギリスの貿易商により横須賀・逸見村の小高い丘の上で発見され、鎖国政策の中で伝説化していた按針の存在が裏づけられました。

三浦按針ことウィリアム・アダムズは、1600年(慶長5年)乗っていたオランダ船が難破して日本にたどり着きました。船長の代わりに大阪へ送られ、豊臣政権下の徳川家康の取り調べを受けましたが、アダムズの信念ある態度や力量を見抜いた家康の英断で全員釈放されました。

このアダムズがもたらした大砲や西洋甲冑や火薬のおかげもあり、関ヶ原の戦では徳川勢を勝利に導いたとも言われています。また伊豆の伊東で日本初の西洋式帆船建造を手がけ家康に喜ばれ、相模国逸見村の250石の領地を与えられ、旗本に取り立てられました。本来は逸見であるがイギリス人には「ん」の発音が出来ず、「へみ」となり現在に至り、逸見町の町名で残った等々、逸見住職のお話を拝聴致しました。

そのあと、西伊豆堂ヶ島の海辺のかくれ湯の名で知られる「ホテル清流」で1泊。夜の宴会では、4名の初参加者の紹介、カラオケで賑やかに、また仮装姿で歌を競演、みなさん大喜びで楽しい一時でした。

翌日は、松崎町の「長八記念館」を見学。この記念館は、本願寺派浄感寺が運営されています。長八とは、本名入江長八で、1815年(文化12年)伊豆の国松崎に生まれました。幼少の頃浄感寺の華水塾で学び、壁などに使う漆喰の名工となり、漆喰とコテで絵を描く長八独自の芸術を完成させ、長八の名は日本中に知られました。

浄感寺の天井図「雲龍図」は、平成23年3月静岡県有形文化財に指定されています。また漆喰で製作された「龍の天井図」は、日の出側から見ると日の入り側から見るとは、目の輝きが違って見える精巧な仕上げに驚かされ、本当にすばらしい作品でした。

有意義な門信徒の旅を楽しく過ごさせて頂き、有難う御座いました。合掌

(村田 太喜夫 記)

